

諸悪

人物紹介——

| | | |
|-------------|------|---------|
| 四万間儀門（しまどい） | ぎもん | 父親。 |
| 四万間小妙（しまどい） | こたえ | 母親。 |
| 四万間供花（しまどい） | きょうか | 長女。大学生。 |
| 四万間土継（しまどい） | しつぎ | 長男。高校生。 |
| 四万間涯奈（しまどい） | はてな | 次女。中学生。 |

0

四万間土継が家に帰ると妹が首を吊っていた。

1

「とりあえず救急車を呼んで、警察にも連絡はした……でも僕が涯奈を下ろした時にはもう……」

土継が帰宅し、妹——涯奈を見つけてからまだ10分も経って

いない。その日はたまたま家族全員が家にいたのだが、現在居間に集まっているのは土継と父だけで、母は嗚咽を漏らしつつトイレに駆け込み、姉は自分の部屋へと行ってしまった。土継も含めて各々がまだ混乱……と言うよりは事態を認識出来てすらいないうようだ。

「とりあえず涯奈は例えば……誰かに殺されたとかではないんだな……？」

数秒とも数分とも言える沈黙を破ったのは父で、それは本当に答えを欲していると言うよりは、沈黙から逃れるため絞り出された一言に聞こえた。

土継も決して考えがまとまったわけではなかったが、それでも状況整理をするように、出来る限り客観的な記憶を探る。

天井からぶら下がる妹。倒れた椅子。あまりにもいつもと変わり映えのない整頓された部屋。

「うん……まず首吊りして時点で他殺向きではないし、それに部屋に入るにはどうしても玄関から居間を横切って入る必要があるし、それなら父さんが気付くはずだ。窓にも鍵がかかっていて外から入るのは難しかったんじゃないかな……」

陸の孤島とは言わないまでも、セキユリテイ万全ともいえないまでも、誰にも気付かれずに一人殺す——しかも首を吊るすなどそう出来ることには思えない。それに——

「それに机の上には遺書もあった」

——涯奈の遺した一枚の手紙。

初めから父の問いかけに力がないのは、その手紙とすら言い難い質素な紙一枚。存在の重さに対してあまりにも簡潔なその内容にあった。そこにはこう記してある。

『唐突にすぐ死にたくなってしまったので自殺します。自殺とは自ら、私自ら命を絶つことです。お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お兄ちゃん、さようなら』

父が疑っているのも同様にこの遺書のせいでもあった。

「自殺と明記してあり過ぎて逆に怪しい……」

そんな土継のぼやきに、ただ会話を途切れさせたくないのか父は追隨した。

「そうだ、仮に万が一でも殺人だとするなら、家族としてそれを見つげ出す義務がある」

「そんなの警察の仕事だよ」

「警察に任せてお前は気が晴れるのか？ 俺は自分の手で犯人を見つけてやる」

「だから自殺だって言ってるじゃん」

「だったら俺は誰を憎めばいいんだ？」

「別に誰を恨む必要もないんじゃないかな」

「じゃあこのやり場のない怒りはどうなんだ？ どこに向ければ

良いんだ？」

「それは……」

「誰も悪い奴がいけないのにこんなことが起こるのか？ そんなことがあるわけない。誰か、あるいは何かあるはずだ。憎むべき悪い奴が——」

「ならこの場合悪いのは妹じゃないかしら？」

「な……」

土継と父の答の出ない会話に割り込んできたのは、先程まで部屋に籠っていた姉の供花だった。父も戸惑いつつも受け応える。

「……供花、お前は何言ってるんだ？」

「だって殺した奴が悪い奴なら、自殺で悪いのは本人だってことじゃない？ 違うの？」

「別に涯奈だって好きで死んだわけじゃないだろう……」

苛立った父が言ったのに対し、供花はにやりと口元を歪めると芝居がかった口調で言う。

「へえ、それはつまり何か原因があって、仕方なく死を選んだって言いたいのかしら？ ならちゃんと探すべき、探して憎むべき相手もいるかも知れないわね。その怒りは私に向けるべきじゃないわ。探しましょう、大事な妹は死に追いやった悪い奴を」

「とりあえず私は一番悪いのは土継だと思うんだけど、どうかしら?」

「どうかしらじゃないよ!?!」

第一発見者を疑うのは良くある話だが、この場合はそういう問題ではないと思う。

「何で僕が悪者扱いされなきゃいけないんだ」

「あら、だって土継がもう少し早く帰ってくれば、涯奈の自殺を止められたんじゃないの?」

「……そ、それは」

そえは結果論だと土継は言おうとしたが、供花のはっきりとした物言いにやや押されてしまう。それに言いたくない理由もあった。

「僕は今日、部活があつて遅れたんだ」

「部活と言っても今日は休日で午前だけでしょ。いつもはもっと早く帰って来てるわよね」

確かにいつもは昼頃には返ってくるはずが、今日は1時間近く遅かった。

「……………」

「何で遅れたの?」

「それは……………」

「それは?」

「部活の帰り際にその…………後輩の女の子呼び出されて…………」

「それで?」

「……………告白されて」

「へえー、それはそれは…………」

やけに楽しそうに「ふふふ」と笑う供花に土継は頭を抱える。何でそんな嬉しいイベントの当日にその暴露会をしなければいけないんだろうか。

しかしそれを言ったことでとりあえず言い訳にはなっただろう。そのようなプライベートを家族の前で明かす代償は、果たして釣り合いが取れているかと言うと、何だか騙されているような気分になったが。

とりあえず供花は「うーん、そっかなるほどねえ」とようやく土継から疑いの目を逸らしたようだ。そして再び真面目な顔をして言う。

「じゃあ、悪いのはその女ね」

「なんでだよ!」

間接的に告白話を晒されて、揚句に悪者扱いでは最早女の子のほうが悪者と言える。

「未来の小姑(涯奈)に対する先制攻撃ね」

「気が早すぎる……………」

そろそろ後輩が可哀想に思えてきたところで、供花はポンと手を叩いて「まあ」と続けた。

「ここはとりあえずその子の恋心に免じて保留にしましょう。そ

「そもそも『未然に防げたかもしれないから』って方向で考えていくのは結果論過ぎるわね」

「それが判ってるなら、さっきの質問はいらなかったんじゃないかな」

その過程の為に怪我人が二人増えてしまった。

何にせよどうやら土継は、今度こそ本当に供花の疑いから逃れたように胸を撫で下ろす。躊躇いなく弟に懐疑の矛先を向ける姉には恐怖を抱くが、話し合えばすぐそれを収める辺りはぎりぎり家族の対話と言えるのかも知れない。一度でも肉親を疑うほうがおかしいのだ。姉は土継から目を逸らし、そのままその隣を見やっていた。

「じゃあ、お父さんはどう？」

……ただ矛先が父に向いただけだった。

「俺が何をしたんだ？」

「例えば仮に誰かが侵入していた場合、あれが自殺じゃなかった場合は、侵入に気付かなかったお父さんの責任になるわ」

「そんなわけないだろう！」

いよいよ声を荒げる父。当然だ。さすがにこれには土継も冷静さを欠いた父を弁護する。

「姉さん、さすがにそれはおかしいんじゃないか。だってこれは初めから『自殺だったら』って前提の話だったんだし、それだと侵入した犯人が悪いつてことになるわけで」

「フツ、分かって言ってみただけよ。いるかどうかも分からない——謂わば実体のない侵入者よりもまず手近な父を糾弾してみたのよ」

「手近って……」

実体があれば父を疑う理由も分からなかったが、父はその滅茶苦茶な理論で逆にやや落ち着いたように静かに反論を述べた。

「ふん、思い出してみればその時間は丁度家の前で道路工事をしていたはずだ。少し天井が軋んだくらいなら気付かなくて当然だろ」

「道路工事！　さすがお父さん良い所を突くわね」

供花はわざとらしく、と言うより演技らしく驚いてみせ、そのまま続ける。

「私もここ数日工事をしていたことは知っているわ。でも妹に聞いているならそれだけじゃないのよ？」

「なんだって？」

「妹と工事の人たちは数日前に喧嘩しているのよ」

それは父と土継にとっては初耳だった。

「喧嘩した理由は？」

「妹はもう受験シーズンでその時間は毎日部屋で勉強してたのは知ってるでしょ？　そして外では絶え間ない騒音とくれば、妹の性格を考えればキレて文句をつけに行きそうじゃない？」

「確かに」と父。

「(確かに)」と土継も口に出さないまでも心の中で同意した。喧嘩っ早いのである。

「私が言っておいてなんだけど、信頼のない可哀想な妹……。うちの愛する妹はいくら苛ついても、さすがにいきなり暴言を吐きかけるような真似はしないわ。社会的常識は意外とあるのよ？ まあ、代わりに参考書を投げつけていたけど」

「……………」

それも想像できた。喧嘩っ早い上に手も早いのだ。

「そこで工事の人も大人の対応なら良かったんだけど……結局は喧々諤々の大喧嘩。どちらの言い分が通ったかは——ここは言わなくても分かるわよね」

それは今日も元気に工事が続いているのだから明白であった。妹は喧嘩っ早くて手が早く——口喧嘩は弱いのだ。

「さて、ところでだ」

妹の二重の意味で可哀想事情は分かったが、しかしそれが何の話に繋がるのだろうか。姉にそう質問すると。

「それは勿論、作業を妨害された仕返しにお父さんと共犯の道を選んだと言う話に繋がるのよ」

「念入り過ぎるわ」

第三者による妨害工作。妹は要人か何かなのだろうか。

そこで今まで黙って聞いていた——と言うか呆れていた父が床を叩くかのように勢いよく立ち上がった。

「もういい！ 俺を疑ったところで何にもならないのはもう分かっているだろ！ いつまでも付き合ってもらえるか！」

「あら？ 憎む相手を探してたのは父さんじゃない。もつとやりましょうよ。そう、家族の力を合わせて妹の仇を取るのよ！」

父は馬鹿にされたと受け取って(多分馬鹿にしている)更に激昂し机を押しつけ、そのまま供花に掴みかかろうとした。

——しかしその騒ぎはそれより大きな音を立てて部屋の扉を開けた侵入者——すなわち母の小妙によって妨げられた。

「さつきから何騒いでるの！ 涯奈が死んだって時に！」

固まる土継と父親を後目に供花は嘆息し、フツツと笑った。

「次の犯人の登場だわ」

3

母——四万問小妙は学校の勉強が好きだった。いや、正確には勉強をさせるのが好きだった。当人は特に優秀と言うわけでもなく、他人よりやや多めの勉強時間でも成績は常の上の下といったところ。その癖自分より勉強の出来ない人に教えるのを生き甲斐としていた。それは勿論善意などでなく、言うならば人を無理に興味に駆り出す類のものと見える。

しかし先述の通り、母自身は勉強が出来るわけではなく、そして自分より成績の良い相手に教えることに興味はなく、何より教え方が下手だった。趣味と仕事を両立できる憧れの職業——すなわち教師の道はやがて諦めたそうだ（それは母の教えたがり人生の唯一の英断である）。

そんな母にとって子供の誕生はさぞかし嬉しかったろう。土継は幸いにも母と同じくらいの出来だったので、早々に興味を持たれなくなってしまうが、ご想像の通り、喧嘩っ早く短気であり賢くなく、ついでに不幸な妹は勉強が嫌いだった。憎んでいた。小学校に入る前から「勉強」の二文字を見ると逃げ出す子供だったので、母の影響などは関係なく元々そんな性格なのだ。

母はむしろそんな妹だからこそ燃える性質で、二人の争いが四万問家の日常となったのは当然の成り行きだろう。

家出17回。登校拒否4回。塾逃亡8回。サボリ遅刻等々数知れず。受験シーズンで勉強してると言えば真面目そうだが、実際は切羽詰まった状況と、母の無理強いが合わさって初めて机に向かえているだけなのである。

つまり——

「つまりお母さんからの日々与えられ続けるプレッシャー、そして勉強への嫌悪感と受験への重責。これらが涯奈をあそこまで追い詰めてしまったのよ」

「確かに今までに比べると至極真つ当な理由だ。さっきまで荒唐

無稽な事件に思えたけど、何だか有り触れた話に思えてきた」

「だから工事の連中は勿論、俺も関係ないって初めから言ってるじゃねえか」

「……………ちよつと何の話してるの？」

話についていけない母に供花は簡単に説明する。妹の死が自殺だと言うのならば、一体誰のせいであつたのかを探している、と。

「今の所はお母さんが第一候補で、第二候補はその時間に家にお父さんね。そして土継と言ったところかしら」

そうまとめたところで、いい加減思っていたことを土継は言った。

「と言うか姉さんはどうなんだよ。人のことばかり言ってるけど姉さんだって家族だし関係なくはないだろ」

「私はその時間は丁度出かけていたわ。帰ってきたのは土継が涯奈を見つけた後よ」

供花は別段慌てる様子もなく答えたが、そういう姉に今度は土継がやり返す番だとばかりに畳み掛ける。

「何で出かけてたんだ？ 僕の理由だけ訊いておいて自分は知らないなんて言わせないぞ」

「ああ、涯奈の誕生日ケーキを買いに行っていたのよ」

「……………」

「パーティとまでは言わないまでも、誰かしらケーキくらい用意

してあると思つたら何も無いんだもの。まったく……いつものことながら可哀な妹よね」

「……姉さん」

「なに？」

「涯奈の誕生日は先週だ」

「……」

士継もすっかり忘れていたのだけど。父も気まずそうに目を逸らしているようで、どうやら今思い出したらしい。

供花は珍しく一瞬言葉に詰まっていたがすぐに気を取り直して続きを話し出した。

「うん、これで家族全員に『誕生日を無視して死に追いやった』という可能性が追加されたよね。良かったわね士継。これで彼女さん——ついでに工事のおじさんの落ち度が減ったわ」

「そうだね……」

誰かの落ち度を探ろうとするたびに、涯奈の不幸エピソードが増えるだけの気がしてきていた。

そして横を見れば母は先程より冷静さを取り戻しているようで、ようやく口を開いた。

「要するにあたしが一番涯奈に酷い事をしていて、そのせいで娘は自殺したって言うの……？」

その声は震えているようにも聞こえた。ずっとそんな話をしていたので麻痺していたが、常識的に考えればこれは母親に向かっ

ていきなり「あなたが娘を殺したんだ」と言っているようなものであり、やはりそのショックは想像を絶するものだろう。

「そうね。今のところはそんな感じかしらね」

そんな容赦のない供花の言葉に母が怒り出すか、あるいは泣きだすかしないかと心配していると、母は静かに先程の言葉の続きを紡ぎ出した。

「……ふっ、それならあたしだって理由は思いつくわ。確か三日前にお父さんが涯奈の携帯ゲーム機借りて行ったわよね」

「なっ……!」

再び突然指定されて驚きながらも、何でそれを知っていると聞いたげな父。凶星らしい。

「その日の夜に涯奈がゲーム機の液晶画面にヒビが入ってるって騒いでたわ。そしてあたしはそのちよつと前に階段で何かを落とす音を聞いてるけど、あれは何だったのかしらねえ」

「そ、それは……」

取り乱す父に不敵に笑う母。そして供花も楽しげに笑いながら話に加わる。

「おやおやー、何だかまた分からなくなってきたわね。ちよつと理由としては弱めだけど、何よりネタが新しいのがポイント高いわ。ショックで落ち込んで衝動的に……」

「いや待って待って！ 確かにあれは俺の責任だがちゃんと後で新しいの買つてやろうと思つて——」

「その前に死なれちゃあねえ」

「うるさい！ お前だつて五日前に涯奈が買ってきたお菓子を勝手に食べたことで喧嘩してたじゃないか！」

「ふんっ、あの分はその日のうちに涯奈に散々文句言われて噛みつかたからチャラでしょ！ 大体さつきから良い子面で聞いている士継と供花だつて一緒に食べたじゃない」

「僕もきつちりぶん殴られたよ」

「私はしつかり逃げたわ」

「供花、あのね」

「でも、そもそも私は日常的には涯奈の面倒見てあげてるもの。これが減点方式なら私はプラスになつてもおかしくないわ」

「……………」

「……………」

「……………」

供花以外は「迷惑をかけている」の言い間違いかと期待したが特に撤回はなかった。

「そういえばこの前涯奈が楽しみにして行って結局何も当たらなかったスーパーの福引。あれは不正があつたんですってね」

「じゃあスーパーの店長が悪いのか？ それを言うならお前がこの前呼んだ家庭教師。あいつは結局3時間説教と自慢話をしていただけで、涯奈も随分ポロポロになつていたぞ。——そうだが、士継、この間廊下で涯奈とぶつかった時に、あいつの持つてるス

トラップが落ちて踏んで壊しただろ」

「あれこそただの事故じゃないか」

「でもあれは確か涯奈が苦勞して手に入れたもので——」

「苦勞したのは父さんがその日涯奈が出かけようとした時に丁度玄関前に車を止めていて——」

「しょうがないだろ、たまたまあそこで車が壊れたんだから。その日は母さんが買い物に行こうつて——」

「あたしのせいだつていうの！」

「だつてそれがなければ——」

「うるさあああああ——い！」

四万問家最後の一人にして声の主——次女の涯奈は先程まで自身を吊るしていた縄を鞭のように構え叫び声をあげていた。

「途中から部屋の外で聞いてたけど、何で皆してあーだこーだ結論の出ない話してるの！？ 先にわたしを降ろせよ！ そして病院なり警察なり連絡する場所もあるでしょ！」

息も絶え絶えに士継らに怒声を浴びせ続けた。両親は再びぽかんと口を開けてしまっているの、士継は何とか冷静さを取り繕

つて一番すべき質問をする。

「……何で死んでないの？」

「ひどい質問っ！ あ、いやあ……それは誕生日のこと含めて最近わたしの扱い雑だなーって思っ、驚かしてやるうかなくて……。いや、良くある悪戯だよ」

どうやら初めから全て涯奈の三文芝居だったようで、首つりのトリックについては「それこそよくあるトリックだよ」と説明すら流されてしまった。しかし、それを追及する元気は皆とうになく、つまり呆れを通り越して脱力してしまっていたのだ。

こうして事件ですらない騒動は当人のネタ晴らしで終わりを迎えた。

後日落ち着きを取り戻した両親から、涯奈は目を背けたくなるようなお仕置きを受けることになるのだが、今日のところは「生きてて良かった」と言う雰囲気のまま夕飯を迎えられそうだ。

一件落着と言いたいところだが、さて——その前に何故か先程からしたり顔をしている姉さんにその理由を聞いてみた。

「だって私が最初に言った通りだったでしょ？」

「何が？」

「妹が悪いって」

今回の悶着では何だか家族全員がお互いの汚い部分を見せて

しまったような気がする。それは間違いなく落ち込むべき事案なのだが——同時に一人を除いて全員が気付いた救われるべき点もあった。それは——

「……さすがに姉さんよりはマシだよ」

「フッフ」

ようやく言えたこの反論も鼻で笑われてしまった。

あとがき

諸悪の根源。そんな言葉がありますが、事実がどうかはともかく、悪の元凶を探ると言うのはなかなか不毛な行為であると思います。例えばイジメがあつて、イジメ側は別のイジメっこにそれを強制されていて、更にそのイジメっこは——以下無限ループの様に、それこそ逆れば原罪まで遡れそうで、そこまで行くとそれこそ善悪の問題ではなくなってしまいそうで——多分そんな感じの話でした。

元々は『悪』のテーマの時に考えていた「家族で淡々と責任を押し付け合う話」があつたのですが、淡々としすぎて終わり所がなかったので、キャラクター性を強めて作り直したものです。何となく分かると思いますが、主役は長女の四万問供花で他の家族はそれに合わせて作りました。何気にSS企画では初めてのキャラ性の高い人物なのでなかなか楽しかったです。ただ場面を混乱、悪化させるだけのすなわち『死惑い凶化』。また機会があれば主役の話を考えてみたいものです。

それではここまで読んでいただきありがとうございました。
そして参加者の皆さんはお疲れ様でした。ルフでした。